

会報

無肥研だより

第6号

2019年1月15日 発行



「無肥研だより」第6号をお届けいたします。今回は2018年11月18日に開催させていただきました無施肥無農薬栽培農産展の報告とお茶生産者の紹介をさせていただきます。「無肥研だより」を会員の皆様にお届けするようになって、2度目のお正月を迎えました。本年も無肥研の広報誌として、当会の活動紹介や行事の案内等に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

★ 活動報告

無施肥無農薬栽培農産展 (2018年11月18日)

昨年は、記録的な高温や相次ぐ台風の上陸、さらに夏の水不足や秋の長雨等、例年とは異なった気象の影響が取りざたされました。そのような気象条件にもかかわらず、恒例の無施肥無農薬栽培（以下「無施肥栽培」という）農産展には、北は北海道から南は沖縄までの57の生産者・グループから、丹精を込めて作られた農産物246点のご出品を頂くことができました。会場には生産者・研究者・流通関係者・消費者それぞれ立場の違う方が遠方からもたくさん来場されました。また、京都是秋の観光シーズンということもあり、通りすがりに興味を持たれた方も来場されるなど、約370人の方々にご来場を頂きました。

1. 農産展

会場は1階と2階に分かれており、2階では農産物を展示し、その周りにはパネルで全国の実施者の紹介、2018年に行った無肥研の活動紹介、さらに無肥研が行っている調査の中間報告をさせていただきます。展示された農産物には、米や豆などの穀物類が65点、甘藷や里芋などの塊根類が48点、ミズナやホウレンソウなどの葉菜類は47点、ダイコンやカブなどの根菜



類が30点、その他にミカンやユズ、茶など幅広い出品をいただきました。来場の皆様方は、肥料や農薬を一切施さずにできたりっばなダイコンをはじめとする野菜類に大変驚いておられました。1階では無肥研の活動紹介のビデオ上映コーナーや販売コーナーを設けました。当日は、無施肥栽培のお米をはじめ、ネギ、人参、バナナなどの生鮮物や、お茶、味噌、醤油、トマトジュースなどの加工品が販売され、多くの方で賑わいました。

終了後に堀江武理事長から、農産展に関する講評がありましたので、以下に要約して紹介させていただきます。



「初めて農産展を見せて頂き、想像した以上のりっぱな出来栄えに驚きました。中でも一番驚いたのは大根でした。葉は貧弱で小さいですが、それに比べて大根の大きな姿に植物が環境に適応して、養分が乏しいなら、乏しいなりにうまくバランスをとっていると感じました。養分が乏しいですから、どうしても一番養分を必要とする器官である葉を豪勢に茂らせてしまうと、実に回る量が減ってしまうこととなります。葉・自分の体はそこそこにして、次の世代に繋がるような、あるいは貯蔵器官・蓄えを多くしていこうとする働きが植物にはあるということがよくわかりました。植物というのは条件に応じて如何様にも変わるものだとい

うこと、そのなかで最もよい姿を見せてくれていると思いました。それは養分が乏しいと、乏しい養分を得ようとして先ず根を伸ばして、それから葉という順番になってきて、あるところから次に養分を貯蔵することによって変わってくるというバランスが大事だと思いました。

肥料とか農薬を使わない栽培ですから、乏しい養分の中で、どのようにして作物を育てるかを考えてみますと、やはり生育期間をある程度長くとる必要があると思います。土から出てくる養分は少しずつ少しずつ出てきますから、時間をかけて蓄えるという栽培が大事だと思います。そういう意味から、①適期に植えること、②土の貴重な養分を雑草にとられないようにために除草すること、③深く掘って根の活動する範囲を広げてやるようなことが、この栽培では大事だと思います」



2. 講演会

岩手県の山地（やまち）酪農家である中洞正様が「無施肥無農薬栽培と山地酪農」と題してご講演くださり、103名の参加がありました。なかほら牧場は北上山系の標高700～850mの山間地にあります。中洞様は山の植生を活用する山地酪農という手法を取り入れられて、牛は一年を通じて山で自由に過ごし、太陽と月と雨と土中のバクテ

リアの力だけで育つ野シバや木の葉を食べて暮らしています。そういう自然の中で育てた牛からでないと、おいしい牛乳はできないことなどをお話し下さり、参加者は熱心に聞き入っておられ感動の1時間でした。





3. 試食懇親会

無施肥栽培農産物の試食懇親会が行われ、会員・非会員合わせて68名の参加がありました。中には初参加で4.5haの農地で稲作を中心に、ご夫婦で無肥料栽培をされている方、本年8月26日の見学会で行かせて頂いた伊藤様の農園で研修の後、新たに就農されて野菜作りに取り組んでおられる方、無農薬栽培の農産物の販売をされている流通関係の方などがおられ、少しずつではありますが、交流の広がりを実感させて頂きました。無施肥栽培作物による料理を味わいながら、堀江理事長や白岩理事、講演者の中洞正様を囲んで、研究者・生産者・流通関係

者・消費者と異なった立場の人たちの話の輪が幾重にも広がり、活発な意見交換が行われました。



★ 生産者紹介

無施肥無農薬栽培茶園 実施者

日本人にとって米と茶は日々の生活に無くてはならない存在であります。最近では世界的な日本食ブームも手伝って茶の需要は少しずつ海外でも増えつつあると聞いております。一般慣行栽培の茶葉生産現場では、これまで生産量と品質を確保するために農地への多量の肥料と農薬の投入が行われており、近隣への環境負荷の増大が問題視されたり、消費者による健康志向の動向が懸念されています。その中において10年以上の長期にわたって無施肥栽培の茶葉を生産し、製茶まで手がけている無肥研会員農家が3軒あります。紙面の関係もあり今回は1農家の紹介になりますが、今後、順次紹介させていただきます。

上嶋爽緑園（うえじまそうろくえん）

- 生産者 : 上嶋伯協 様
- 生産地 : 京都府綴喜郡井手町
- 茶園経営規模 : 5.5 ha
- 無施肥栽培面積 : 24 a
- 実施開始年 : 1998年
- 栽培品種 : コマカゲ



上嶋様の茶園は、山間地の谷筋に位置し、周囲の茶園とは隔離されているため、農薬類の飛散はほとんど見られません。10年間続けて来られた慣行栽培茶園を1998年に無施肥栽培に切り替えて、今年で21年目になります。品種はコマカゲで2018年は1番茶の摘採を5月24日に行い、その後親子番茶を6月8日に摘採されています。2番茶は獲らず、夏場は数回にわたり園内の除草を行い、次年の春に刈り揃えをして新芽を待ちます。1番茶の収量は生葉で約80kg/10aであります。無施肥の煎茶はとても爽やかで喉ごし良く、慣行栽培茶とは全く別物の旨みがあります。



★ 今後の行事予定

総会・研究報告会・懇親会 (2019年3月17日(日))

無肥研究会の皆様にご出席いただき、当会の前年度の活動結果並びにその結果を踏まえた次年度の事業計画や活動予算などを話し合わせて頂く**会員総会**と、どなたでもご参加頂ける、当会の事業の柱であります無施肥栽培の調査研究の成果をご報告させて頂く**研究報告会**、そして皆様の意見交換の場としての**懇親会**を、3月17日に開催します。詳細は決まり次第、お知らせしますので奮ってご参加ください。



会員総会



研究報告会

会報についてのご意見を、郵便、FAX、e-mailでお寄せ下さい。皆様のお力で会報を充実させていきたいと存じますので、ご協力のほどお願い申し上げます。(編集担当)

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町106-2
特定非営利活動法人 無施肥無農薬栽培調査研究会
e-mail : mail@muhiken.or.jp FAX : 075-751-0368

URL : <http://muhiken.or.jp/wp/> Facebook : <https://www.facebook.com/muhiken/>